

わたしたちの協会は、日中平和と友好条約の精神を守り、子々孫々世々代々にわたって両国の友好を発展させるために努力し、新潟県及び日本と世界の平和と繁栄に貢献します。



特定非営利活動法人
新潟県日中友好協会
 〒951-8068 新潟市中央区上大川前通 7 番町 1243
 新潟商工会議所中央会館 2 階
 TEL.025 (224) 6050 FAX.025 (224) 6051
 会長 長谷川 義明
 【地域組織】
 吉川日中友好協会 新発田市日中友好協会
 栃尾日中友好協会 中之口日中友好協会
 いわいね国際交流協会

新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹の旅 2006

新たに930本を植え面積1haに

協会内外の23名が参加

長谷川義明会長をはじめ23名の方々が現地を訪れ、7月20日に白音諾勒村小学校の児童生徒・教職員や村民の皆さんと一緒に植樹に取り組みました。

“ふれあいの森”2006の植樹・保護育成・管理経費21万7千円は、植樹の旅に参加された方々の協賛金と（財）新潟県国際交流協会の事業補助金によってまかなわれました。



植栽面積計1haに

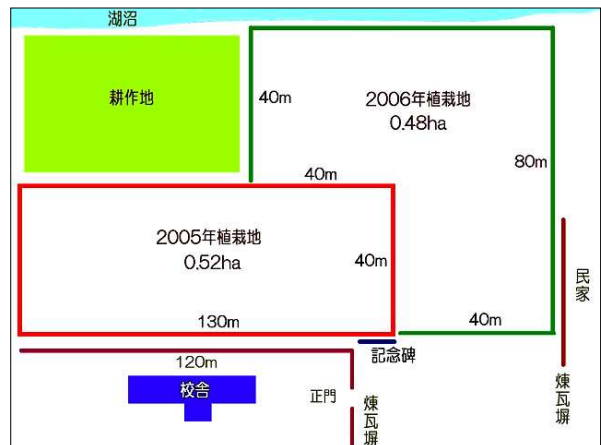
白音諾勒村にはまとまった林地はほとんどありません。過去二年で計1haに“樟子松”を植栽しましたが、順調に育てば局地的とは言え相当の生態的利益を生むと思われます。

右上図は、過去二年の植栽実績です。

“ふれあいの森”の植樹は、白音諾勒村において生態環境の回復保全事業が自律的に立ち上がることを願って企画したものです。

黄砂は遠く新潟にも

黒龍江省第二の河川—嫩江の流域に位置する杜爾伯特蒙古族自治县は、420mm前後の年平均降水量に対し年平均蒸発量が1,750mm余に達するなど、草木の生育環境はもともと限界に



近い状態にあります。加えて、自給のために余儀なく農地を拡大し続けたことや経済的立ち遅れの挽回を急ぐ余り過放牧に陥るなど、人為的な要因による地表植生の破壊が進んでいます。

この地で発生する黄砂は、遠く新潟にも及んでいると推定されます。また、嫩江流域の洪水は松花江と黒龍江（アムール河）を経て日本海へと注ぐことから、準閉鎖海域である日本海の海洋環境に影響を与えることも懸念されます。

農地・草地防護林の整備はこれから

県政府は県の西北部から南東部にかけて散在する幅20km長さ90kmの砂地に植樹する事業（“西北風口治理”）に取り組んでいます。いまだ県域の27%は砂漠地のままとっています。

特に、耕作地の表土を風蝕や水蝕から守る農地防護林、牧草地の退化を防ぐ草地防護林の整備は今後の課題となっています。

負の循環下にある白音諾勒村

白音諾勒村にあっては道路両側の防風林整備はある程度進んでいます。農地内の既存防護林はその機能を発揮するに至っていません。秋の収穫後から春の作物植え付けまでの約半年の間、耕

作地は裸地に近い状態になりますが、既存防護林のほとんどすべてが落葉樹の“ポプラ”のため、防風の役を果たさないからです。また、地表面へのアルカリ塩類集積や繰り返す旱魃と洪水などにより、耕作地は荒廃の一途をたどっています。

白音諾勒村は、村民の生活基盤である農業の生産性が低く、生態環境回復保全のための事業費を支弁することはかなわず、結果として経済的立ち遅れを招くという負の循環下にあります。

良性循環のきっかけとなるよう

2004年以降2006年までの三年間、当協会は白音諾勒村小学校の教育条件改善協力事業に取り組んでまいりました。県政府教育局の理解と信頼が基礎となり、林業局の協力をも得ることができたことから、2005年以降新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”植樹事業へと発展をみましました。

同村の生態環境の回復保全には恐らく半世紀を要し、それを担うのは子どもたちです。“ふれあいの森”植樹事業を企画するに当り、同村の“子どもたちとの協同”を心がけました。子どもたちが、これをきっかけとして、良性循環に向けた施策とは何かを自律的に学び取ってくれるよう願っています。

2007年度は

“樟子松”純林の衰退を避けるため混植を

2007年2月、徐廣明外事弁公室日本処処長と劉国軍同処副処長が新潟県との定期協議のため来県されましたので、2月5日に2007年度の計画について協議し、次のとおり提案しました。

①過去二年に植栽した場所に新たに“山杏”（ヤマアズ）または“沙棘”（サジー）を混植する。



あるいは、②新たな植栽地に“樟子松”を植える。

“山杏”は杜爾伯特蒙古族自治県の自生種で、種子は杏仁（アンニン）として販売されます。“沙棘”は外来種ですが、果肉・種子は食用・飲用・医薬用原材料となります。いずれも、短期的に収益を挙げることのできる樹種であることと、既に植えつけた“樟子松”に混植することにより、単純林の衰退を予め回避することを狙った提案です。

新たな植栽地は、校舎側面に広がる裸地を予定しています。ただし、この場所が輪作のための一時休耕地とも考えられることから、植樹の可否を確認して下さるようお願いしました。

旅行計画の概要

上記について現在確認中ですが、本年は次の予定で実施する計画です。

日程：別記のとおり 旅費：139,500円
募集人員：20名

“ふれあいの森”植樹の旅にご一緒しませんか。
（常任理事・事務局長 今野 正敏）

日程：7月18日（水）新潟→哈爾濱（中央大街など観光・泊）／19日（木）哈爾濱→泰康鎮（昼食）→白音諾勒村（植樹）→泰康鎮（現地関係者との交歓会・泊）／20日（金）泰康鎮→大慶（石油博物館など観光・昼食）→哈爾濱（太陽島公園など観光・泊）／21日（土）哈爾濱→阿城（金上京遺跡など観光・昼食）→哈爾濱（聖ソフィア教会など観光・外事弁公室の招宴・泊）／22日（日）哈爾濱→新潟

旅行お申し込み・お問い合わせ

コスモトラベルビューロー

TEL 025-244-0977

FAX 025-243-6028

旅行お申し込み・お問い合わせ

エヌケートラベル

TEL 025-383-2122

FAX 025-383-2123

PHOTO



“ふれあいの森” 植樹の旅に参加して

私が県日中友好協会に入会したのは、平成16年のTV番組の取材がキッカケでした。

協会では、この年に初めて教育支援―「希望工程」を実施。今までにない、バイナル村小学校への教育支援は、新潟県と黒龍江省の新しい交流のスタートでもありました。

これがキッカケで、翌年からは小学校周辺へ木を植える「ふれあいの森」の事業もスタート。

バイナル村小学校の子どもたちと一緒に、木を植えることは、とても楽しく心に残る思い出になります。

この活動は日本の国際支援が減少する中、国際協力機構（JICA）の協力もいただく素晴らしい事業として認められました。

植樹活動は日本への黄砂を減らし、地球温暖化や砂漠化を防ぐ活動を、行政ではなく、民間の交流として企画し、一般の方が参加できることに大きな意義があります。

私は取材をする中で、行政という形式や枠組み、肩書きがない分、民間交流は人と人の「絆」が深まることを実感します。そして黒龍江省へいつ訪れても大歓迎してくれることに驚かされます。

これまでの長い交流で生まれた「絆」があるからだ、いつも再認識させられます。

約20年前から始まった黒龍江省の県費留学生たちは、新潟で学んだ後、中国で立派に成長し、新潟大学教授や産業人を中国へと呼び、新たな活躍の場を与えています。

そう考えると20年後、植えた木は大きく育ち、教育支援を受けた子どもたちは大人になり、私たちの子や孫に新たな交流を与えてくれる人へと成長してくれるかもしれません。そのためにも、時代の変化に合わせた交流を今後も継続させ、多くの県民が「ふれあいの森」植樹の旅へ参加することは、お互いの未来を明るくする素晴らしいことだと思います。

（バナナプロダクション 高原 美智子）

“白音諾勒村小学校教育条件改善協力事業”

子どもたちの笑顔に支えられ無事終了

この事業は2004年度から2006年度までの三カ年計画で実施してまいりましたが、第三年次は504,000円を持参し、パソコン10台と卓球台1セットを購入・設置しました。

子どもたちの敬礼に迎えられ

7月20日、校庭に整列した白音諾勒村小学校の子どもたちの敬礼に迎えられ、「新潟・白音諾勒村“ふれあいの森”2006植樹の旅」参加者一行23名がバスを降りました。山本昭二副理事長、宮澤一也常任理事を見つけた子どもたちの笑顔が一段と明るい。

邵彦君校長と長谷川義明会長が固い握手を交わした後、長谷川会長は「厳しい条件のなか一生懸命勉強して下さい」「みなさんと一緒に植える木とともにたくましく育ててください」、と語りかけました。



三カ年でパソコン20台ほかを整備

一年目…パソコン10台とテレビ・DVD1セット。二年目…机・椅子100組、複写機1台、顕微鏡8台、録音機6台、投影機(OHP)2台。

小さな教室に真新しいパソコンが20台、整然と並びました。

2003年12月に事業の具体的な計画を相談した際、劉国録校長は言葉を詰まらせながら、「白音諾勒郷中学に進級する際、パソコンの無いわが校の生徒のみが出遅れてしまうことは本当にしのびない、何よりも優先してその整備に協力して欲しい」「2004年9月以降、邵彦君教諭がパソコン教学に当たる」「2005年3月には邵彦君教諭を大慶市に派遣し、パソコン教学の再研修に当たらせる」、と語りました。

その邵彦君教諭は2005年9月から校長となり、同校を率いています。

思えば、劉国録校長のこの熱意と、訪れるたびに笑顔で出迎えてくれる子どもたちに支えられた三年間でした。



計画変更もありました

第三年次事業の実施に先立ち、当初計画には無い卓球台を購入・設置したいとの要望が寄せられました。併せて、当初整備予定の幻灯機2台、印刷機1台は不要であること、また第二年次に購入・設置した顕微鏡8台に加え4台を第三年次に購入・設置する予定であったがこれも不要であるとの意向が示されました。

この事業を助成していただいている「新潟・国際協力ふれあい基金」との協議を経たうえで、品目の変更を承諾しました。

成果と課題

必要とする教育設備機器は満たされ、教育条件は確実に改善されたと判断しています。懸念していたパソコンの運用に係る問題も無いと思われまます。また、パソコン操作が必修となっている初級中学に進学するに当たって他校卒業生とのハンディキャップが発生するとの懸念は、解消されたと判断しています。

杜爾伯特蒙古族自治县テレビ局が積極的な報道体制をとり、ニュース放映を行いました。また、同県人民政府Webサイトにおいても報道されたことにより、同県民の新潟県民に対する友好的感情は一層深まったと判断しています。

一方、第三年次事業実施の過程で、同校への通信回線敷設が未了であることが判明しました。



通信回線の整備は、同校のインターネットを利用した遠隔教育の実施に不可欠です。資金協力をいただいた多くの県民の皆様や関係機関との電子メールによる日常的な交流も可能となります。

今後機会を得て、県政府教育局に対し早急に整備するよう働きかけたいと考えています。

収支決算と残高

三カ年の収支決算は次のとおりとなりました。

収入計147万5千円（うち、自己資金65万4千円、新潟・国際協力ふれあい基金助成金82万1千円）。支出計147万5千円（白音諾勒村小学校教育設備機器購入資金）。

三カ年で新潟から現地を訪れた方は約50名にもものぼり、その渡航経費は総額545万2千円に達しますので、これを間接経費として加えると総事業費は692万7千円となります。

2000年以降、黒龍江省の辺境・貧困地域の未就学児童の復学援助プロジェクト“希望工程”の主旨を汲んで浄財を募ってまいりましたが、お寄せいただいた募金は累計75万7,927円となりました。うち、65万4千円を白音諾勒村小学校教育条件改善協力事業に充てましたので、10万3,927円が残っています。

これをどう活かすか、今後理事会などで検討をお願いしたいと思っています。



林甸県は

この事業を立ち上げるに先立ち、2002年7月に山本昭二常任理事（当時）と宮澤一也常任理事が杜爾伯特蒙古族自治县と林甸県を訪れ、両県の教育事情をつぶさに調査しました。

白音諾勒村小学校への協力を行なっている過程で常に気がかりだったことは、林甸県のその後です。なかでも、白音諾勒村小学校同様に危険校舎で勉強をしている同県四合郷永合小学校（写真下）がどうなったかと。



同県教育局の2006年12月付け報告書によると、永合小学校の校舎は改築済みでボイラー室が設置され暖房施設も整ったとされています。

2006年11月時点で、同県内の104小中学校のうち97校に衛星放送受信設備が設置され、パソコン1,300台が配置されました。林甸県は同年10月に、黒龍江省内に残る義務教育の未普及県5県のひとつから抜け出しました。

林甸県の近況は、近年に至り中国政府が特に力を入れる、農村部の教育振興が地についた結果と思われる。

教育部門への財政投入は一義的に中国自身の課題ととらえますが、その触媒となり得たとすれば、皆様とともに望外の喜びとしたいと思います。

（常任理事・事務局長 今野 正敏）

新潟県・黒龍江省 嫩江流域荒漠化地区生態林建設技術協力事業

試験植栽と林床植生変化の調査段階に

JICA草の根技術協力事業は、第二年次に入りました。

大慶市杜爾伯特蒙古族自治県新店林場・齊齊哈爾市甘南県甘南林場・同市克山県北聯林場の試験区で列状間伐と試験植栽を実施し、林床植生の変化を調査するなど、生態的に安定した混交林への遷移可能性を検証する作業が進んでいます。

次は、専門家の結果報告（要約）です。



■ 光環境改善状況調査結果 ■

1 目的

列状間伐により変化した光条件：PPFD（光合成有効光量子束密度）を、間伐列に直交するラインで測定し、植栽木の成長や各種植物の侵入を判断するための基礎資料を得る。

2 方法

1) 全天空写真の撮影（現地調査）

写真の撮影は、魚眼レンズを装着したデジタルカメラで行った（写真下）。



2) 撮影画像の処理

撮影画像を Adobe 社の Photoshop を用いて処理した。画像解像度を 384 ピクセルにした後、モノクロ2階調化を行った（写真右上）。

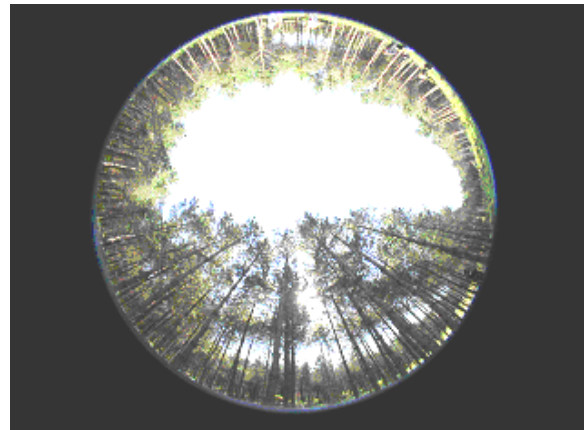
3) 処理画像の解析

解析は、Hans ter Steege 氏開発のフリーソフト Winphot 5.00 を用い、自動計算により、開空度および PPFD 値を求めた。

3 結果および考察

1) 開空度

新店林場ポプラ林は、他の試験地と比べ、対照区でも開空度が 20%あまりと多く、間伐部分の 40%とあまり差がなかった。これは、植栽間隔が



1.5×6.0mで、他の試験地に比べて広いことが主因と考えられる。また、樹種による樹冠形状（枝葉の広がり方）の違いも関わっていると思われる。

甘南林場興安落葉松林および北聯林場樟子松林の開空度は、類似していた。甘南林場の方が、間伐部分などで若干開空度が大きく、植栽間隔等の違いによるものと判断される。甘南林場対照区の開空度に幅があるのは、折れなどにより形成された林冠ギャップ内の測定点が複数あったことによる。

2) PPFD（光合成有効光量子束密度）値

林冠上での 5～8 月の PPFD 値は、各試験地で緯度に大差がないことから、約 18 (mol m⁻² day⁻¹) であった。

林床での PPFD 相対値（林冠上を 100%）は、新店林場ポプラ林では対照区等でも 30%あまりと大きく、甘南林場興安落葉松林および北聯林場樟子松林では対照区等では 10%前後と低く、開空度を反映していた。

3) 間伐による光環境改善効果

伐採部分の北側と南側では、同じ開空度でも PPFD 相対値は大きく異なっている。

すなわち直達光が多い北側で大きく、林冠で遮られる南側で小さい。南側は末伐採部分よりも若干良い程度である。

また北側のある程度の距離の林内まで直達光が到達していると推定される。

植栽木の成長や下層植生の侵入状況の調査結果とあわせることにより、生物多様性の増加に必要な光量の把握が可能である。

（新潟県森林研究所 専門研究員 布川耕市）

■ 植生調査結果 ■

1 調査方法

間伐処理区・新規植栽区の両方において1m×1mのコドラートを設置し、植生調査を行った。

木本類については樹種・本数を、草本類については草種と全体の被覆率を観察・記録し、あわせて写真撮影を行った。

次年度以降における経年変化を比較追跡する目的で、現地には調査区番号を記したプラスチックの杭を設置した。



2 調査結果

風沙区の新店林場では、間伐処理区のみにおいて4樹種の生育が観察されているが侵入数は合計4本と、極めて少ない。これは、周辺にシードソースになる植生が少ないこと、調査区が地域住民の家畜放牧のための通路等に使用されているためその影響（家畜の踏圧や食害）を受けていることも起因していると考えられる。

また、新規植栽区では木本類の侵入が全く観察されなかったが、これは対象地が既存の樹林や集落から離れている（シードソースから遠い）こと、及び塩類濃度が非常に高い場所であること等に起因しているものと考えられる。

平原区の甘南林場では、間伐処理区のみにおいて4樹種の生育が確認されている。合計の個体数は26本であるが、そのうち細葉胡枝子が13本、落葉松が9本となっており、この2種で約85%を占める。甘南の間伐処理区は落葉松林内に設置されているため、落葉松については周辺からの種子供給と考えられる。細葉胡枝子についてはシードソースが確認できない。また、新規植栽区では木本類の侵入は観察されなかった。

丘陵区の北聯林場では、間伐処理区・新規植栽区ともに比較的多くの木本類が観察されている。

特に間伐処理区では7樹種が侵入しており、合計個体数も57本を数える。北聯林場は比較的近い位置に自然林を有するためシードソースが近いことなど、他の2地域に比べて立地条件に特性を持つ。また、新規植栽区においても隣接する落葉松林から種子が供給されているものと考えられる。

3 木本類の侵入特性と更新の可能性

甘南県の甘南林場及び克山県の北聯林場において観察されたいくつかの事柄を、以下に整理する。

①間伐処理区において、間伐によって発生した空地に多くの実生が観察された。

②実生は間伐によって発生した幅10mの空地の中にみられ、概ね次のような位置的有意性が観察された。

- ・空地の中心付近で少なく、北側と南側の林縁部で多く観察される。

- ・北側では乾燥の影響が見られ、黄色く変色した個体が多く見られる。

- ・南側は半日陰状態となっており、侵入した実生も良好に生育している。

- ・空地の中心部では雑草の草丈が高く繁茂しており、北側と南側の林縁部では草丈・密度ともに小さくなっている。

③侵入した実生は、調査区の周囲にある防護林の植栽樹種である。

④両地区では、侵入種数と個体数に大きな差異が観察されている。

今回の調査は、間伐処理後1年目であるため、侵入が観察された木本類の実生が今後どのように遷移（変化）して行くのかは不明である。

しかし、間伐1年目からかなり多くの木本類実生の侵入が観察されたことから、多様性のある生態林建設に向けて「自然侵入を誘導する」こともひとつの手法と考えられる。生態林の建設を目指す視点から見ると、現在ある防護林の構成樹種を増やすためには、周辺からの木本類の侵入がポイントとなるであろう。2007年度は、多様性確保に大きな影響を及ぼすと考えられるシードソースとしての既存林（自然林、人工林含む）の分布と距離、及び間伐処理方法とその後の実生侵入の関係などを検討事項に加えつつ、経年変化の比較追跡調査が必要となる。

（新潟県対外科学技術交流協会 目黒 修治）

新大教育人間科学部学生・院生など22名のスタディー・ツアー 白音諾勒村小学校と新店林場を訪れる



はじめに

平成18年度新潟県国際交流協会の事業（ふれあい基金助成プロジェクト）として、子どもたちに現代のアジアを理解してもらうためのプログラム開発が新潟大学教育人間科学部に委嘱されました。

これを受けた宮園衛（新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター教授）と児玉（同大同学部人間社会ネットワーク講座教授）は、新潟県日中友好協会に協力を要請し、現代中国への理解を深めるための社会科授業開発を社会科教室の院生・ゼミ生とともに実施することとしました。

授業開発において最も重要なポイントになったことが、中国黒龍江省・吉林省へのスタディツアーです。

この場をお借りして、快く協力要請に応じていただくとともに、ツアーの企画とお世話をいただいた日中友好協会常任理事・事務局長の今野正敏さんに深く感謝申し上げます。

また、現地では黒龍江省外事弁公室および黒龍江海外旅遊総公司のみなさん方に通訳やガイド、迎賓館での歓迎会など過分なるお世話をさせていただきました。参加者を代表して厚く御礼申し上げます。

ツアーの概要など

ツアーの概要と印象に残ったことは以下の通りです。

9月11日（月） 新潟空港発ハルビン空港着。バスにて社爾伯特蒙古族自治县泰康鎮陽光温泉

ホテルへ5時間かけて移動。

大都市ハルビンの発展の様子、旧満州の大地に伸びる高速道路、トウモロコシ畑の地平線に沈む赤い夕日、連綿と点在する大慶油田の掘削井、交差点の真ん中で道順を訪ねる運転手さんのバイタリティーなどがたいへん印象的。



9月12日（火） 午前中、白音諾勒村小学校を訪問し、子どもたち・先生方と交流。教育支援の着実な成果に触れることが出来た。また、子どもたちの持つ大きな夢のすばらしさと、若い校長先生の教育への情熱をひしひしと感じた。

午後は新店林場のJICA技術協力試験区で試験植栽の実際を研修。整然と並ぶ樹木の姿に緑化への希望を持つとともに、せっかくの樹木の中を牛が歩いていく姿に学生は驚いていた。新しく植え替えているという種目の苗や腐葉土を食べてしまうことを心配したのである。

その後、教育局にて同県独自の教育政策である「愛心工程」の説明を受ける。わが国の教育行政と同じく、地方の小規模校の統廃合を、合理化・効率化の観点で向上させるといった説明として受け止めた。

なおこの地域のバスからの景観として、湖の多さに驚いた。塩類濃度が高く、魚がいないというのが残念でならない。

また、個人的に21年間高校の世界史で教えてきた「東清鉄道」の路線を見ることができたのは感激であった。

9月13日（水） ハルビン市へ移動。駅前のホテルで昼食、にぎわいに触れる。

午後は「731部隊」記念館を見学・研修した

後、長春市へ移動。

「731部隊」については、学生達は事前研修をかなり行ってきていただけたに、現場に身を置くという体験は得難いものようであった。

頭を垂れて同国人の非人道的な所行を深く反省するのみ。

9月14日（木）午前中、旧満州映画製作所、偽皇室博物館、旧国務院（吉林大学医学部）を訪問、見学。“満州国”の残像・歴史的事実に接し、事の是非を越えて感慨にふけること大であった。

ハルビンへの帰途、今野さんよりビッグニュースありと伝えられる。あり得べからざることに、我々一行が迎賓館に招かれるとのこと。

一同、ネクタイを着用の上、緊張の面持ちで歓迎会に臨む。

徐廣明処長さんたちの信じられないくらい闊達な日本語による暖かいもてなしと、素晴らしい料理・お酒の数々に感謝・感激のひとつときであった。

さらに、ホテル到着後、ガイドの呉澤鋒さんのご好意でキタイスカヤ（中央大街）を案内いただいた。ロシア風の石造りの町並みの幻想的な夜景の中で、楽しいひとときを過ごすことができた。

9月15日（金）ハルビン空港発新潟空港帰着。

時差の関係で早朝の出発でも到着時はお昼。全員無事の帰国を喜ぶと共に、所期の目的を達成したことを確認して解散式。

社会科授業開発と実践

スタディ・ツアーでの研修等に基づいて、院生・学生は現代中国を理解させる社会科授業を開発し、以下のように実践した。

10月24日（火）新潟県立新潟西高等学校にて、対中国ODAは今後も必要か否かを生徒自身に主体的に判断させる政治経済の授業を実施。

白音諾勒小学校の様子や環境問題などは援助の必要性を考えさせる面での資料として活用。

12月1日（金）・12月5日（火）万代長嶺小学校にて、中国の地理的概要（人口、民族、言語分布など）と日中間の関係について子どもと会話しながら探究させてゆく授業を実施。

教育支援や植林支援の実態を、日中間の現在の交流として紹介する。

12月8日（金）新潟大学教育人間科学部附属中学校、12月21日（木）新潟県立村上中等教育学校にて、それぞれ現代中国の荒漠化の原因を経

済的な貧富の差から探究させる授業を実施。

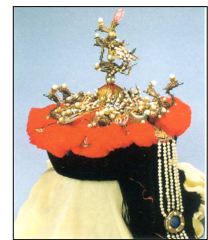
せっかくの植林場でなぜ農民が家畜を放牧させるのかという問題を、農民と都市部住民の経済格差の面より考えさせた。

以上、まだまだ不十分ではあるが、貴重なスタディ・ツアーの成果を教育活動に生かすべく社会科教室一同、努力をしてきたところです。今後ともみなさん方のご指導・ご鞭撻をお願いする次第です。ありがとうございました。

（新潟大学教授 児玉 康弘）

EVENT

北京故宫博物院展



西太后とラストエンペラーの歴史人物展 ～清朝末期の宮廷芸術と文化～

北京故宫博物院所蔵の「西太后」「溥儀」関連資料125点にて構成

6月16日（土）～7月16日（月・祝）

新潟県民会館3階ギャラリー

* * * * *

主催：テレビ新潟ほか

特別協力：北京故宫博物院

後援：新潟県日中友好協会ほか

【入場料】

一般・大学1,100円

小・中・高校600円

【お問合せ】

テレビ新潟 北京故宫博物院展事務局

025-283-8190

<http://www.teny.co.jp/event/>

中国残留婦人の半生を描く語り芝居

帰ってきたおばあさん



念願叶って懐かしい祖国に一
時帰国した王桂花。
鹿兒島の錦江湾の浜辺で、ボ
ランティアに自身の半生を語
り始めた…

◆ あらすじ ◆

開拓団として夫と共に旧満州に渡った二十歳の鈴木春代（中国名：王桂花）。敗戦で逃避行する中、足手まといになると強制されてわが子を手につけ、果ては夫にも見捨てられる。

生きるために中国人と再婚し、文化大革命の迫害の嵐をもくぐり抜けて、60年の歳月を経てようやく故郷鹿兒島に帰ってきた彼女は、自分を捨てた前夫に会おうとするのだが…

7月7日（土） 新潟ユニソンプラザ
（開場14：30 開演15：30）

前売り：2,000円

当日券：2,500円

主 催：新潟県モラロジー協議会女性クラブ

【お問合せ】

新潟事務所 025(373)5205（小林）

長岡事務所 0258(32)7976（藤井）

◆ 編集雑記 ◆

4月11日、中国の温家宝首相が来日した。中国首脳の日訪は、実に六年半振りのことである。昨年10月、安倍総理の日訪中が、両国間の氷を砕くといわれたのを受けて、温首相は、氷を溶かすための来日と語っている。

この数年間、日中両国の関係は、国交正常化以後最悪の状態が続いていた。小泉前首相の靖国神社参拝が契機となって、まさに厚い氷に阻まれるような関係に陥ってしまった。特に両国民に悪感情を助長したことは、大変不幸なことであった。“政冷経熱”などといわれた時期もあったが、首脳間の交流が全くない状況は、不自然であり異常であった。

今回“戦略的互惠関係”という少々解りにくいフレーズであるが、両国首脳の日友好且つ前向きな意見交換が行なわれたことは、喜ばしい限りである。失われた過去は、一度や二度の首脳会談で取り返せるものではないが、これから回を重ねるごとに成果が得られるであろうし、それを期待したい。それにしても、あの靖国参拝というトゲは何であったのか、小泉前首相の負の行為は、到底容認するわけにはいかない。

この度新潟市が北京に事務所を開設したと報じられた。今後どのような事業を展開するのか、大いに期待し、声援を送りたい。

わが協会の“緑化事業”と、一段落した“希望工程”一学校の援助も、徐々に成果をあげつつある。大海にコップ一杯の水を注ぐようなものかも知れないが、千も万も“一”から始まるわけで、継続は力なりである。

編集者：常任理事 巾 昭

吉川日中友好協会

〒949-3445

上越市吉川区原之町2010-8

吉川土地改良区内

025(548)2808

新発田市日中友好協会

〒957-0053

新発田市中央町4丁目11-22

石井修事務所内

0254(24)4411

栃尾日中友好協会

〒940-0216

長岡市栃尾新町1-3

佐野二ツ内

0258(52)3202

中之口日中友好協会

〒950-1348

新潟市西蒲区打越丙1503

平岡様方

025(375)3272

いわね国際交流協会

〒959-3424

岩船郡神林村大字牧目576

穂菜味亭内

0254(66)7809

発行人：理事長 奥村 俊二

編集者：常任理事 巾 昭

印刷所：有限会社 東新印刷